ISSN2187-7157

地域記録集　土佐の村々4　高知県安芸郡芸西村久重地区

久重山村

「地域記録集」は、
人々が実感を持って感じる地域の単位で、
きめ細やかな歴史の記録を目指している。
1000を超える江戸時代の土佐藩の村々から、
かつての行政区分である
山分・浦分・里分の村を順次とりあげ、
古代から現代までの歴史を概観する。
本号では山分に属する安芸郡芸西村久重地区を取り上げる。
数カ年かけ集落を歩き、資料を調査し、
人々から話を聞いて編集したのが本誌である。
廃村の危機に瀕する或る「村」の歴史と、
そこで暮らした人々の記憶から、地域社会のあり方や課題、
あるいはその可能性について改めて考えてもらいたい。

久重地区（旧香美郡久重山村）

高知県東部、安芸郡芸西村の最北部に位置する山間地域。北部の山稜に村内最高峰の目高森を配し、東西の谷筋には赤野川とその支流が南流、一帯は植林・雑木林で覆われている。

長宗我部氏と安芸氏がこの地で覇権争いを繰り広げた戦国期には、近代まで続く板渕・宇留志・大屋敷・加重・ツヅラオの5名（集落）で構成されていた。中世以来、香美郡に属したが、昭和の大合併で道家・国光（白木山）とともに安芸郡芸西村に編入した。

かつては、山の斜面や谷間に家々が散在し、その周辺には田畑が広がっていた。久重のなかには「山の街」と称された100人規模の集落も存在したのである。

しかし、高度経済成長期以降は過疎化の波にさらされ人口が激減。昭和40年代には、行政支援のもと集落移転事業が行われ複数の集落が消滅した。その後も、人・家屋・墓・神々が山を下り続け、現在残るのは1世帯になっている。

平安から戦国の久重山

～久重山の古代・中世～

古代の地域の姿をもとめて

平安時代、承平4年（934）頃に成立した『和名類聚抄』には、土佐国内の郷（当時の行政単位）が郡別に記されている。久重地区の周辺では、安芸郡に和食郷、香美郡に大忍郷が確認できる。

久重地区は、現在は安芸郡（芸西村）に属すが、中世には香美郡大忍荘に属しており、恐らく、平安時代後期には香美郡に属していたものと思われる。

中世大忍荘の世界

～山林資源豊富な大荘園～

大忍荘は、土佐国東部の大荘園として知られる。荘域は、香南市香我美町の岸本・徳王子などの海岸部・平野部に始まり、香南市西川・東川などの丘陵性山分を経て、香美市物部町の県境の山分にまで広がっていた。

大忍荘の地域区分は、里分（岸本・徳王子・山南・山北）と山分（西川・東川・槇山）に大別される。この内、久重地区は山分の東川地域に属していた。

久重地区については、室町時代までの資料がほとんどなく、どのような歴史を歩んだ地区なのか、残念ながら不明である。

大忍荘推定荘域図
荘園領主は時期により異なり、紀伊の熊野神社、鎌倉の極楽寺、京都の禅宗寺院などが領主であった。
（『高知県史　古代中世編』昭和46年〔1971〕より転載）

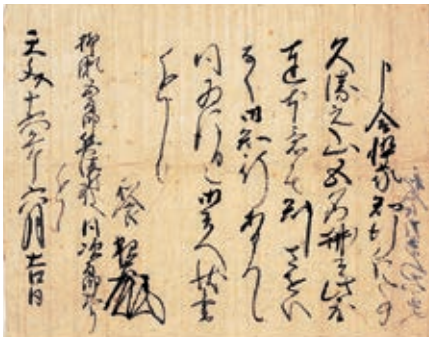
戦国時代の久重山

～「久衛之山五名」～

久重地区に関する初見資料は、柳瀬文書にある天文16年（1547）6月の和食親忠書状である。時は戦国時代、土佐国内の西部では一条氏と津野氏が、中部では長宗我部氏と山田氏が覇権を争っていた頃であり、東部では安芸氏と和食氏が対立していた。

この和食親忠書状は、当時、大忍荘への進出を企図していた韮生（香美市物部町）の柳瀬氏に宛てられたもので、和食氏が安芸氏との合戦に勝利した際には、これまで通り「久衛之山五名」の支配を柳瀬氏に認めることが記されている。和食氏と柳瀬氏の同盟契約的な内容の書状である。

この書状からは、天文16年当時、久重地区が「久衛之山」と称され、五つの「名」（五つの地区）から構成されていたことが分かる。また戦国時代の社会状況のもと、周辺土豪の進出を受ける地域となっており、とりわけ、南に接する和食氏の影響力が強い地域であったことが想像される。しかしこの後、和食氏は安芸氏に滅ぼされ、久重地区は安芸氏の支配下に入った。



和食親忠書状（個人蔵）
2行目に「久衛之山五名」と見える

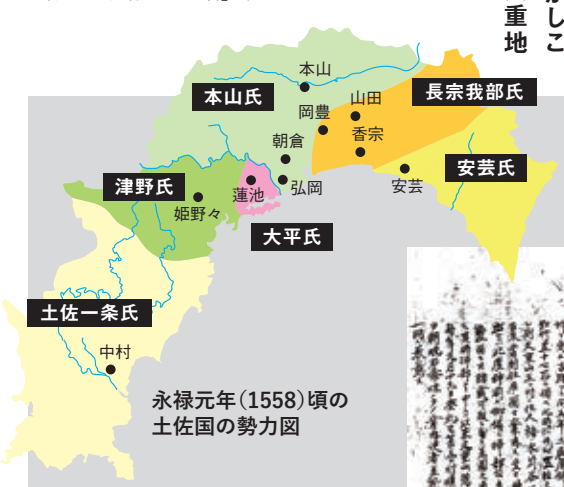
伝承が語る地域の歴史

山中家の入部伝承

江戸時代に久重地区の村役人をつとめた山中家には、家の来歴を記した系図書がある。それによると、山中家はもとは山内氏（窪川氏）と称し、高岡郡仁井田五人衆の一氏族で、窪川城を居城として一条氏に従っていた。永禄3年（1560）、山内掃部正充年の時に、安芸国虎に招かれて久重山（漆名のセトノモトカ）に入部し、長宗我部氏の安芸郡への侵攻を警戒するため、当地を守護したとされる。

仁井田神社の創建

久重山に入部した充年は、永禄5年（1562）に土居屋敷（漆名のウルシノ谷カ）に入り、高岡郡仁井田五社の中宮を勧請し、久重山の惣鎮守として仁井田神社を創建したとされる。この時、村の有力者たちが充年に従い、神社の祭日・五ヵ村順番の祭礼方式などが定められたという。史実か否か判然としないが、久重山をめぐる戦国時代の状況が、何らか反映されているものであろう。



永禄元年（1558）頃の土佐国の勢力図

山中家系図書（個人蔵）
土居屋敷に入った充年が、新たに惣鎮守を勧請し、久重山五ヵ村の住人、梅木・苅谷・谷岡・谷山氏らを祭祀儀礼を通して従えていく様子が記される。

大屋敷にある仁井田神社
かつて山上にあった八面王神社も合祀されている。

長宗我部地検帳にみる久重山五名の風景

長宗我部氏による検地

戦国時代に土佐を治めた長宗我部元親は、豊臣秀吉の太閤検地の原則に従い、天正15年（1587）9月より、土佐国全体の総検地を実施した。

久重地区については、天正16年正月に検地が実施されており、大忍荘地検帳の一部として、検地の記録が伝わっている。

赤野川の上流、標高約4百メートルの山間部に位置する久重地区の戦国時代の状況について、長宗我部氏の検地記録から、可能な限り復元してみよう。

◀大忍庄地検帳
久重地区の検地内容を記す「大忍庄地検帳」の表紙（右）と、久重地区の書き出し部分（左）。

「くゑの山五名の帳」

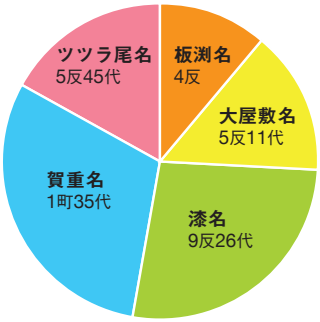
地検帳では久重地区の冒頭に「これより、くゑの山五名の帳」と見出書があり、板渕名・大屋敷名・漆名・賀重名・ツツラ尾名の五つの名別に田畠屋敷地の検地内容が記される。当時の「くゑの山」は五つの名（地区単位）から構成されており、そのおおよそのエリア区分は表紙の図の通りであった。

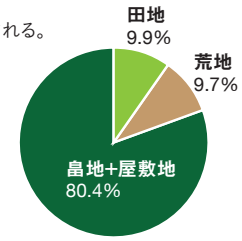
畠と屋敷地を中心とした長宗我部氏の直轄地

地検帳には「くゑの山」五名全体で、13筆（13ヵ所）の土地が記録されている。田畠屋敷地の総面積は3町5反17代で、いずれも長宗我部氏の直轄地であった。

田畠屋敷地の面積を名別に見てみると、賀重名が1町35代で最も開発が進んでおり、五名全体の約3割にあたる（下図参照）。

また、地目別に見てみると、田地は全体の約1割と少なく、畠地と屋敷地の合計が約8割となるように、畠地と屋敷地を中心とした土地利用の形態が知られる（畠地と屋敷地のそれぞれの面積は不明）。





名別の田畠屋敷地の割合
ならびに地目別の割合▶
田地が少なく、
畠地耕作が基本であったことが想像される。
畠地には切畑（焼畑耕作地）も
含まれていたであろう。

屋敷と居住者

屋敷数については、板渕名（記載なし）、大屋敷名4、漆名8、賀重名5、ツツラ尾名2の、計19が記録されるが、その内、居住者が確認できるのは、賀重名の四郎右衛門のみである。ただし、五名それぞれの扣主として名前の見える□衛門（板渕名）・忠衛門（大屋敷名）・二郎兵衛（漆名）・与二郎（賀重名）・太郎左衛門（ツツラ尾名）等は、それぞれの名の旧名主と推測され、各名に居住していた可能性が高い。

ちなみに、賀重名の四郎右衛門は、字「カリヤ谷」に居住していた。「カリヤ谷」は久重地区から西方にある道家・国光両地区への分岐点にあたり、社会生活上の一つのポイントになる地点であった。

▲長宗我部地検帳（重要文化財、高知城歴史博物館蔵）
原本の表紙と冊子の姿。土佐一国分368冊が伝わる。

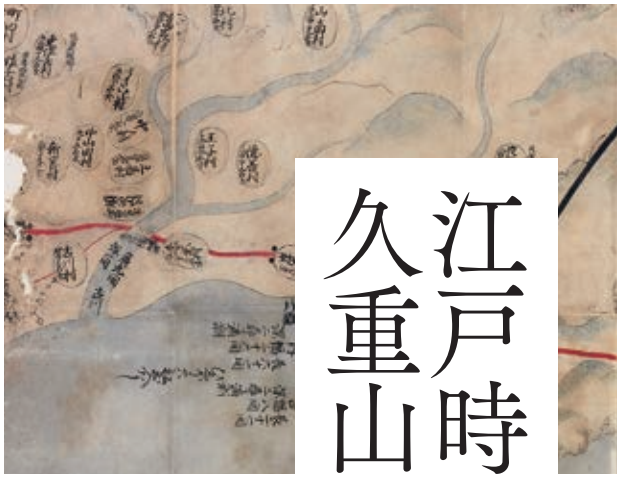
久重山の惣社と地蔵堂

大屋敷名には「クヱ五名ノ惣社」と記される仁井田権現が鎮座し、「三間二間ノ横殿」の社殿を構えていた。同社の神田としては、賀重名とツツラ尾名の字「カチウタ」に計2反15代の神田があるが、これは霜月（11月）15日の神事用の神田であった。

また、漆名の字「ヲソコヱ」には二間四方の地蔵堂があったことも知られる。

ヲソゴエの地蔵堂
賀重に所在（地検帳では漆名に記される）。昭和42年（1967）廃堂後の風景。
（『芸西村合併40周年記念誌　私の好きな芸西』平成6年〔1994〕より転載）

江戸時代の久重山村



江戸時代の久重山村　○印の位置に「くえの山村」の文字が見える。
『元禄土佐国絵図』より、「くゑの山村」付近抜粋（高知市立市民図書館蔵、元禄13年〔1700〕頃成立）

村の位置と人口等

江戸時代の久重山村は、香美郡東川村の枝郷（えだごう）として、東西1里（約3.9㎞）、南北1里ほどの村域をもち、戦国時代と同様、大屋敷・加重・ツヅラオ・宇留志・板渕の五集落からなりたっていた。

村の石高

江戸時代の久重山村の石高に関する帳簿類には、長宗我部地検帳の地積を踏まえて、約35石と記されることが多い。

しかし、これは本田の石高（表高）であり、新田分を含めた実際の生産高とは異なる。江戸時代を通じて、山間部でも新田開発が進んだことは間違いなく、明和2年（1765）の『御巡検御改差出書抜』には、実高として88石5斗8升が記される。つまり、本田分の35石を引くと、53石余りの新田開発が明和2年頃までに進んだことが確認できる。

また、『芸西村史』には、天明8年（1788）の新田分として、57石1斗8升7合が記されており、江戸後期までに久重山村は、本田と新田を合わせて100石に近い生産力を有していたようである。

村の戸数と人口、馬と猟銃の数

年代		寛保3年（1743）	明和2年（1765）
戸数		59戸	54戸
人口		316人	309人
牛馬		牛5疋	牛11疋
		馬1疋	
猟銃		15挺	―

『郷村帳』（寛保3年）・（『御巡見御改差出』（明和2年）による。

宇留志・山本家伝来「火縄銃 銘摂州住山田五兵衛作」（高知県立歴史民俗資料館蔵）

村の信仰

大屋敷に所在する仁井田神社（久重山村の総社）には、天明4年（1784）の加重・白木山からの寄進札（画像❶）、明治3年（1870）に神社の拝殿建立を目的とした大屋敷・漆（宇留志）・葛籠尾（ツヅラオ）・加重からの寄付金を記した板書、各地域から奉納された絵馬などが伝わる。

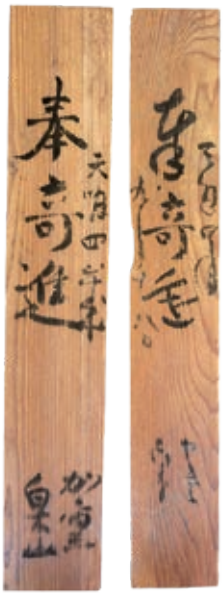
なかでも、明治4年（1871）9月に漆の氏子中から寄進された「賤ヶ嶽の合戦・七本槍の図」は、幕末の絵師・絵金（えきん）（弘瀬金蔵（ひろせきんぞう））によるもので、芸西村指定文化財である。

村の産物～山の恵み～

山間部であるため、僅かな田地しかなく、楮・薪・炭など山林資源に由来するものが、村の生産物の中心であった。

畑では、茶・サトイモ・サツマイモなどが栽培された。また、明和2年（1765）の『御巡見御改差出』によると、村内に9つの堂（養蜂箱カ）があり、7貫500目の蜂蜜を収穫していた。

養蜂箱（板渕）



▶画像❶　天明4年（1784）の棟札（仁井田神社蔵）
加重・白木山からの寄進を伝える。

各地区の神社・祠・御堂

所在地区	神社・祠・御堂	現在の名称
大屋敷	仁位駄権現	仁井田神社
	三宝御崎	（三宝様）
加重	日知権現	聖神社
	地蔵堂	（※廃寺）
ツヅラオ	十二社権現	十二所神社
宇留志	姥権現	宇賀神社
	恵比須権現	恵比寿神社
板渕	名松大明神	名松神社

▶絵金筆「賤ヶ嶽の合戦・七本槍の図」
（仁井田神社蔵）
疫病退散を祈願して奉納されたと伝わる。

「山中家文書」の世界

～古文書が伝える江戸の山村～

山中家文書（芸西村文化資料館蔵）
江戸時代の久重山村の歴史を伝える。

江戸時代に久重山村の村役人を務めた山中家には、江戸時代から明治時代にかけての村政や村人の生活の様子などを伝える数多くの古文書が保管されてきた。

この資料を用いて、久重山村の江戸時代の歴史を垣間みよう。

御留山（おとめやま）をめぐる諸問題
～山で働く人々の姿～

土佐藩は、藩財政にとって大切な資源となる林産物を確保するため、領内の良質な山林を保護、監督下に置き、御留山として管理した。久重地区の御留山は、ヤケシダ山・高平山・灰床山であり、主に松や杉が切り出された。

資料には、文化6年（1809）の高平山での材木切り出しにおいて、板渕・大屋敷・加重・宇留志・ツヅラオのそれぞれの者が一同に集まり、現場を5つに分けて、老若男女が働いていたという様子が記されている。

しかし、この材木の切り出しにおいては、土地所有や賃銭払いなどで、名本・山中家・百姓という三者間で争論があるなど、山間部特有の材木をめぐる問題が生じていたようである。

他方、江戸中期以降、土佐藩は御留山の増設を進めるが、それは山間部に暮らす人々の肥草山（こえくさやま）（農作業に必要な肥料の供給源）を減少させた。これにより、肥草山をめぐる問題が藩内各地で起こるようになり、久重山村では南に接する馬ノ上（うまのうえ）村との間で、肥草山の境界争論が生じている。

文化6年には、馬ノ上村の直助が、久重山村の肥草を刈り取ったことに対する詫び状を山中家に提出している。詫び状によると、この問題は内済で終えたが、以後、直助やその近類に、御留山や知行所などに無断で入らないことを堅く誓約させている。

山村において、山のあり方は村人の生活を支える重要な資源だったのである。

山村を襲った自然災害
～大雨による収穫の減少～

寛延3年（1750）の久重山村の「免状」（年貢徴収の内訳）には、損田として1町4反余り（約1万4千㎡）の記録がある。広範囲にわたる田畑の収穫が見込めない状況に陥っているのである。

この要因は、この年の4月から6月にかけて土佐を襲った5度にわたる大雨であり、久重山村でも甚大な被害が生じていた。藩は水害によって生活が厳しくなった村々に対し村田を認め、年貢の減免を行なっている。

村の安定は、村人にとっても藩にとっても重要であり、時に災害等に見舞われつつも、暮らしを維持する政策が図られたのである。

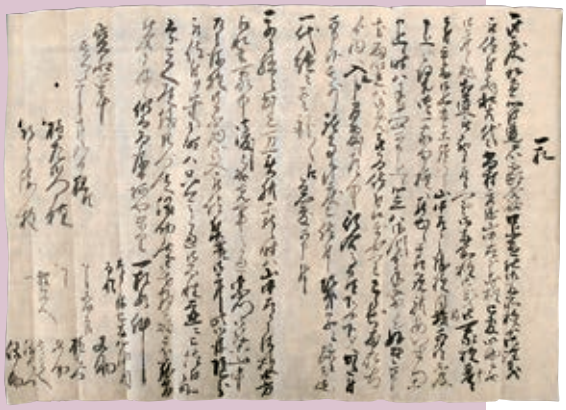
又助兄弟の詫び状

山中家文書に「又助兄弟の詫び状」（宝永4年（1707））として知られる一通の文書がある。この宝永4年頃の又助兄弟は、「百姓並」という身分であったが、もとは代々山中家に仕える「被官（ひかん）」の家の者であった。

被官とは、主家に従属しており、主家から耕地を借りて年貢や小作料を納め、主家の様々な労働や農作業等に労力を提供してきた人々である。

江戸中期には各地で新田開発が進み、「被官」の中にも自身の土地を有する者が現れ、土佐藩は宗門改（しゅうもんあらため）を機に「被官」を調査し、「被官」を「百姓並」とする政策を進めたといわれている。

又助兄弟も新田開発を進めて山中家からの自立を目指し、藩の方針もあって江戸中期頃に「百姓並」となった家の者である。しかし、これまでの従属関係を払拭する道は険しく、主家であった山中家に「心得違」（不手際）があったとして、宝永4年に詫びを入れたのがこの文書である。



山中家文書の内、**一札（又助兄弟の詫び状）**（芸西村文化資料館蔵）

又助兄弟は詫び状で以下の内容を山中家に誓約
①山中家の屋敷を訪れた際は、
　一家の誰に対しても手をついて挨拶します。
②笠は門前でとります。
③草履や草鞋は雨落ちより外で脱ぎます。
④道中で出会った際は下へ下へと退きます。

文書から、又助兄弟は「百姓並」となっても「ヒ官筋目」という肩書きがつけられており、過酷な身分的待遇を誓約させられていたという様子が分かる。さらに、これから先に万一失礼があった場合には、山中家の「被官」に戻ることも誓約している。土佐藩の方針があったとしても、山間部においては、従属関係の解消に時間を要したことが垣間みえるのである。

近代の久重

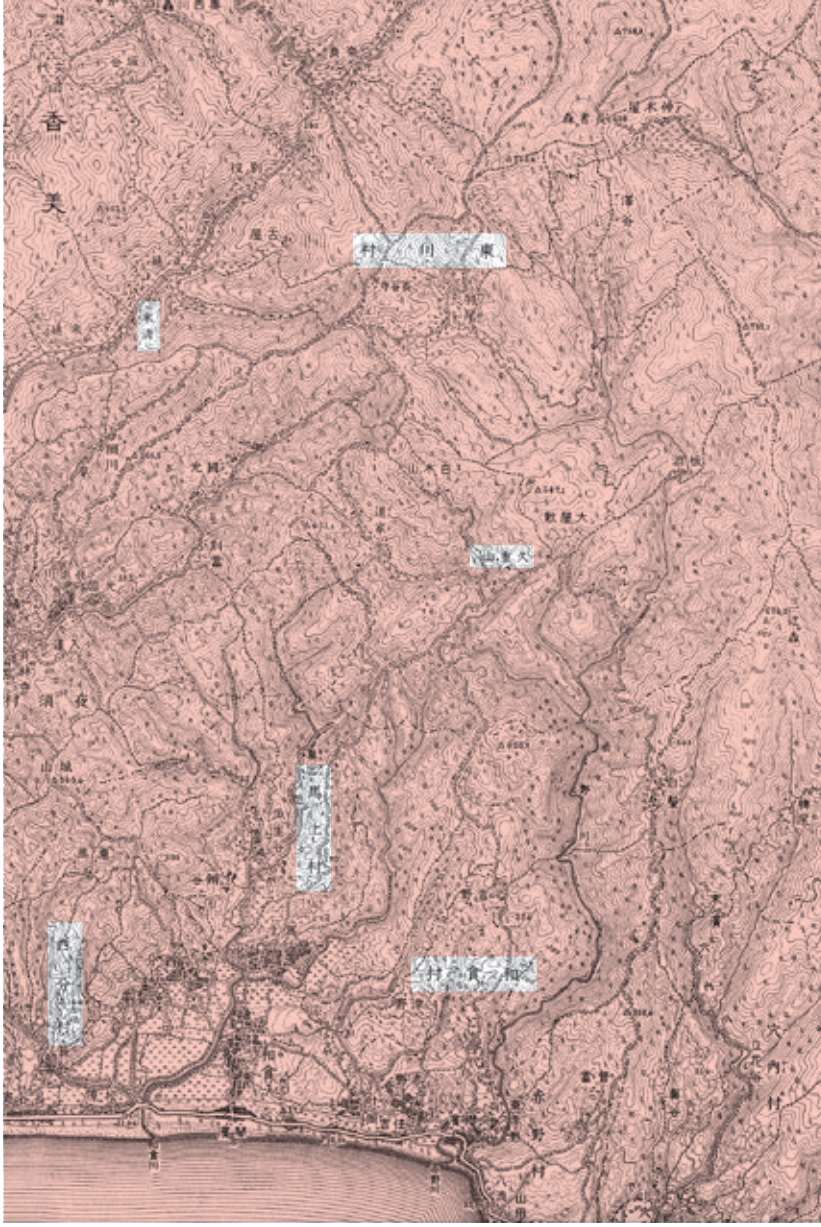
久重地区の合併史

江戸時代「久重山村」としてあったこの地域は、明治の行政制度改革により、明治4年（1871）に香美郡第八区東川に、同8年（1875）から同11年（1878）にわたり施行された「大小区制」の下では第三大区第四小区に属した。

大小区制は同11年に廃止、代わって郡町村制が敷かれ、久重は香美郡東川村の一部となった。東川村は、羽尾・別役・末清・東川・福万・久重・道家の旧7ヶ村からなる。

東川村役場のある末清とは地理的にも隔絶されていたが、久重地区が香美郡に残ったのは、中世の大忍庄以来の行政把握の伝統が未だに生き続けていた証左である。

昭和29年（1954）7月、安芸郡和食・馬ノ上・西分の3ヶ村が合併し芸西村が成立、翌年4月に、久重・道家・国光（白木山）は芸西村と合併した。庄園体制成立以来、香美郡の一部として生きてきた久重山であったが、交通・流通・通学の実態に合わせた合併によって、約850年に亘り属した香美郡から、安芸郡に移管されたのである。同37年（1962）に村議会選挙が一区制になる前は、久重地区（道家・白木山含む）に一議席が割り当てられていた。



▲東川村周辺の地図
（明治44年〔1911〕国土地理院発行
1/50000地形図の東川村周辺部分）

村の産物

久重地区を特色づける産物は、芋と炭である。江戸時代も遠くない明治13年（1880）の『香美郡産物調査』では、久重地区を含む東川村の芋と炭の生産量は群を抜いている。

炭は1釜20俵（12キロ）で、月に2～3釜、人によっては、1回に50俵を月に3回焼いたという。昭和38年（1963）頃までの話である。

今回の現地調査の際にも、案内者からは、芋と炭の話が頻出したが、実はこの2種の産物に集中した生産構造が、後に「廃村」の大きな要因となるのである。

▲炭小屋跡（大屋敷）

▲芋穴跡（宇留志）

	夜須村	山南村	山北村	西川村	東川村
粳（米）	4315.035 石	1972.5 石	1917.8 石	1790 石	870 石
甘藷	22350 斤	3500 斤	26500 斤	-	187500 斤
薪	540 ハエ	600 ハエ	300 ハエ	-	1200 ハエ
炭	-	-	-	-	1300 貫
蜂蜜	-	-	-	-	80 貫
楮草	-	-	-	40000 貫	3000 貫
大半紙	2000 束	2000 束	-	25000 束	4000 束

東川村には、この他に穀類として裸麦・栗・稗・大豆・小豆が収録される。

村の学校

校区は久重・道家・国光（白木山）の3地区。

◎久重小学校の歴史

明治7年（1874）　民家を借用し開校。生徒4名・教師1名。その後岡屋敷へ新築。
昭和25年（1950）　改築。
同27年（1952）3月31日　久重保育所併設。
同50年（1975）　児童数6名となる。
同51年（1976）4月　芸西小学校に統合。保育所も小学校と共に閉園、馬ノ上保育所へ合併。
平成5年（1993）　研修宿泊施設「芸西村山の家」として建替。

◎歴代校長

清遠種次・近藤七郎・吉田稔・小笠原光寛・山中彦吉・宗円直重・井上勝行・小松清郎・安芸尚一・佃茂穂・小松茂枝・立仙敏海・田中豊・坂本福三郎・岡村廣治・吉川薫・益弘善次・浜田頴一・野本博

▲坂本福三郎校長が校舎前に植えたモミジバフウの木

▲昭和25年（1950）改築後の校舎（芸西村教育委員会蔵）

▶校札（芸西村文化資料館蔵）

▲閉校式後の懇談会と合唱する児童6名（芸西村教育委員会蔵）

▲改築前の久重小学校（昭和24年〔1949〕頃、芸西村教育委員会蔵）

戦争と村人

久重小学校跡地には、2基の戦争碑文が建つ。久重における「大東亜戦争」の戦死者は日露戦争の3倍に及んだ。

『奉公紀念』（日露戦争）

建設：久重校下惣中婦人会・青年会

刻まれる戦死者

海軍一等機関兵・勲七等　谷山伊之助
陸軍歩兵一等卒・勲八等功七級　梅木利晴
陸軍歩兵一等卒・勲八等功七級　谷山友之助
陸軍歩兵二等卒・勲八等　山中紀教
陸軍輜重輸卒・勲八等　茂井兵次
※凱旋者17名も記名される（略）

『大東亜戦争戦没者記念碑』

建設：芸西村久重校下民一同（昭和三十四年三月十日）

陸軍中尉　梅木武夫　海軍衛生兵長　大野正治
同軍曹　川村泉　陸軍上等兵　谷山作
同伍長　大野貞夫　同上等兵　谷山春義
同伍長　大野正　同上等兵　谷山法行
同伍長　山内鹿吉　同上等兵　山内要吉
同衛生伍長　山中盛正　海軍上等水兵　谷山光広
同兵長　横山藤明　陸軍軍属　坂本友喜
同兵長　坂本光之

◀『奉公紀念』

◀『大東亜戦争戦没者記念碑』

過疎の進行と「廃村」

山から平地へ

高知県における近代の人口移動は、「山から平地へ」という大きな流れがある。戦前の久重地区の過疎化は、近代の二つの流れであった。昭和45年（1970）・同48年に「廃村」となる板渕・宇留志の戸数変化は左の通り。

	板渕	宇留志
明治30年（1897）頃	24戸	38戸
昭和34年（1959）	11戸	18戸

山深き久重地区だが、山林は共有地が多いため、個人の自由が制限され、造林などが進まなかったという。

押し寄せる高度成長の波

芋・木炭を中心として収入を得ていた久重地区は、産業面で平地に劣っていた訳ではない。しかし、高度経済成長期に訪れた「燃料革命」と昭和35年（1960）に起きた芋の価格暴落が村に大打撃を与えた。

平野部との経済格差

一方、芸西村の平野部では、戦前からはじまっていた園芸農業が戦後更に発展・拡大し現金収入が倍増、山分と平地の生活水準の格差が生じ始める。戦後、年間農業所得が村内平野部70万円の時代、宇留志のそれは20万円に止まり、人々は炭と芋の生産から、農林業と日雇労務に移行していった。

生活の不便さ

生活水の多くは天水・湧水・谷水に頼り、医療機関も不十分（村に診療所1軒）、交通環境も整わないため、「車の通れない道が5、6㎞あり病気の時には困った」（大屋敷住民）という状況であった。人々は徐々に、生活の不便さを自覚するようになった。

教育問題

これに拍車を掛けたのが、教育問題である。宇留志から久重小学校への道は、標高350㍍の山を越える4㎞の道のりで、進学する芸西中学校には通学が不可能で（昭和36年〔1961〕からバスが通る）、子供たちは寄宿舎に入る。「子ども3人が中学下宿で、生活費の半分はその仕送り」との証言もある。村での生活は、徐々に困難の度合いを増していった。

移転のはじまり

移転が可能な村人は、安芸市や野市町へと山を降り始める（自主移転）が、それがかなわぬ、あるいは移転を望まない人々もいた。現在、一面に広がる杉と桧の多くは、村を去る人々が田畑や屋敷地に植林したものである。

集団移転

昭和43年（1968）秋

芸西村岡村村長と白髪（しらげ）地区民との会話（地区運動会後の懇親会）

	昭和 35 年		昭和 40 年		昭和 45 年		昭和 50 年		昭和 55 年		昭和 60 年		35 - 60 増減率	
	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯
国　光	41	9	28	8	28	8	17	7	10	4	11	5	-73.2	-44.4
道　家	114	28	97	25	83	22	56	17	30	14	28	11	-75.4	-60.7
久　重	194	43	124	36	61	21	33	13	38	13	20	8	-89.7	-81.4
板　渕					45．9．30 廃村								-100	-100
宇留志	89	19	58	13	34	10	48．9．30 廃村						-100	-100

▲久重の人口の推移
『高知県の集落』（高知県企画部企画調整課、平成2年〔1990〕）所載の表より作成
※表内の「久重」は大屋敷・加重・ツヅラオの総称。また、板渕の人口・世帯数は「久重」の数値に含まれる。
※大屋敷は昭和46年（1971）、ツヅラオは昭和52年（1977）、国光（白木山）は平成27年（2015）にそれぞれ人口が0となった。

▲加重の水車
（昭和29年〔1954〕、個人蔵）

▶宇留志の家々
（昭和44年〔1969〕頃、芸西村文化資料館蔵）

「このままでは集落がなくなってしまう。村の手でなんとかしてほしい」との住民発言あり

同44年（1969）1月

移住についての現地協議会を白髪に続き、宇留志でも開催

同年4月

村は「芸西村集団移転構想」を策定

村による現状聞き取り開始

対象3集落（同年1月時点）

○宇留志11戸45人

○板渕1戸2人

○白髪17戸77人

（『過疎地域集落移転計画書』〈昭和44年〔1969〕、芸西村〉より）

移転希望の理由

○共同力の崩壊

○収入源の消滅（芋と木炭）

○生活環境の崩壊（道・学校・医療）

○生活苦

○子供たちの将来への不安

○移転困難度の増加

○平坦部との生活格差

※芸西村内38集落の内3集落29戸の全員が移転を希望-24戸は集団移転を希望

※久重（加重周辺）は戸数が多い、道家は経営規模が大きいので移転支援対象外

行政が集落内部に干渉したとして、マスコミの村に対する批判もあったが、村は住民自身の意志を尊重するため、家庭内での十分な話し合いを促した。

最後の移転は、自主移転ではなく支援移転であり、移転先において集落機能が果たせる規模での移転が必要ということで、集団移転の形をとることになった。

移転先は芸西村内の岡本団地（西分）と、極楽団地（和食城本）の2ケ所。岡本団地は村が建設した団地に入居する形をとったため、家財道具の移動・搬入に終わる。一方、極楽団地は地盤整備地への移転であったため、住宅は自力建築となり、一部は旧居住地から家屋を移築した。

集落からの最終移転者は、自らの土地を売却する相手がいないため、移転資金の調達には困難を窮め、村からの支援体制がとられた。

村は墓地と神社の移転に配慮し、住民は先祖代々の墓と神社の多くを移転地に移動させた。信仰施設の保障は、移転の際の重要な要素であった。

岡本団地（5088㎡）

宇留志9戸／大屋敷2戸（当初計画外）／ツヅラオ1戸（当初計画外）　全49人

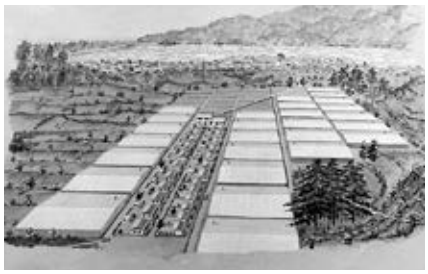
昭和45年（1970）から翌年7月にかけて移転入居が行われたが、住民票等の移動が完了したのは昭和48年（1973）のことだったと思われる。この結果、宇留志と大屋敷が「廃村」となった。

※板渕の1戸は集団移転以前より安芸市赤野で居住しており、昭和45年（1970）に住民登録を移したと思われる。結果、板淵は「廃村」となった。

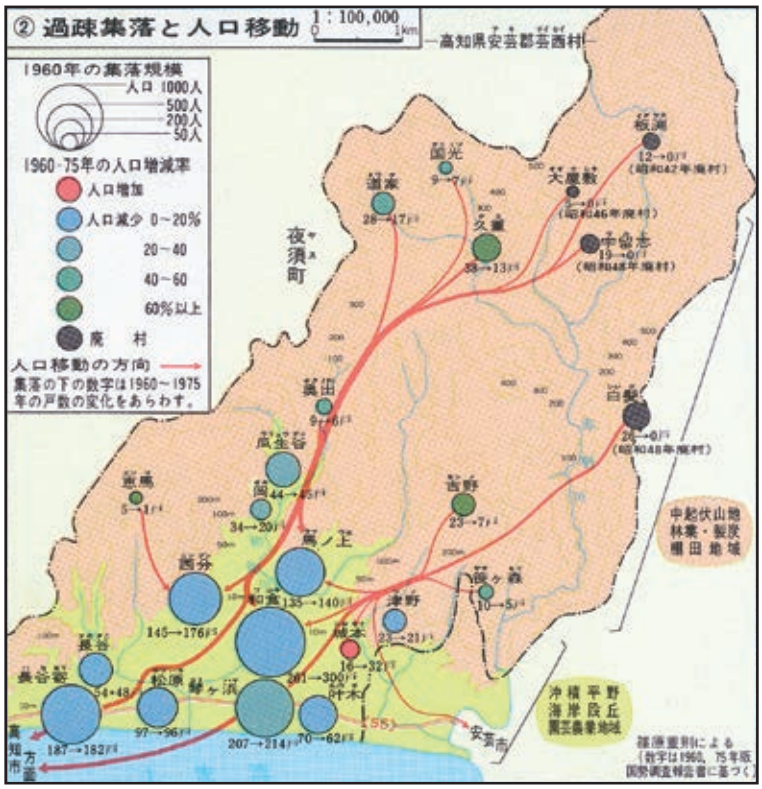
▲建設当初の岡本団地（『芸西村合併40周年記念誌「私の好きな芸西」』平成6年〔1994〕より転載）

極楽団地（4674㎡）

白髪11戸／ツヅラオ1戸（当初計画外）全43人



▲極楽団地の当初計画図
（昭和44年〔1969〕頃、芸西村文化資料館蔵）



▲久重地区の集団移転は全国版の地図帳でも採り上げられた。
『新詳高等社会科地図―最新版―』（帝国書院、昭和59年〔1984〕）より転載
※図中の「久重」は加重・ツヅラオの総称。
※板渕は昭和45年（1970）頃まで1世帯の住民登録があったと思われる。

▲移転について協議する岡村村長と住民（芸西村教育委員会蔵）

▼『高知新聞』
（昭和45年〔1970〕6月19日朝刊、高知新聞社提供）

過疎移住踏み出す 芸西村
近く西分に住宅建設
まず13戸受け入れ

▲岡本団地の住人
（撮影：田辺寿男 写真提供：高知県立歴史民俗資料館）

移転後の生活－住民の発言

『日本の農業 明日への歩み190 集落移転後の20年』（財団法人農政調査委員会、平成6年〔1994〕）がまとめた移転後の調査では、「ひろく世間を見聞できて良かった」という感想や、目ざした経済生活を実現できたことに対する満足感を証言する移転者がいる一方で、「施設園芸への就職を目ざしたが、経験不足からうまくいかなかった」という人々も少なくない。

また、生活環境の変化への戸惑いや断ち切りがたい郷愁の念を語る老人たちがいた。岡本団地への入居は多くの家族にとって新しい生活の出発になったが、高齢者世帯にとっては必ずしも安住の地とはならなかったという指摘もある。

〈老人たちの証言〉

「ここに定住しているがなんとなく仮住まいの気持ちもあり、今でも山に戻りたいと思うことがある」

「こちらの生活はなにもかにも買わなければならないことが苦になった。いまは金になれてしまった。水が臭くうまくない。」

「ここは確かに便利が良すぎる。」

「移住してからいいことがない。」

集団移転の性格

久重地区の集団移転は、高度経済成長期の「廃村」の一典型である。その特色は、直接的・外部的契機ではなく、住民の意思によるところが大きい点にある。

また、宇留志の集団移転は、行政の支援によって実現した「福祉的移住」と表現されることもある。

続く過疎と屋敷

平成6年（1994）
道家10戸 国光4戸 久重4戸

令和2年（2020）
道家3戸 国光0戸 久重1戸

※昭和52年（1977）のツヅラオ廃村以来、久重は加重のみが存続、現在は1戸が残るのみ。

公共交通機関

昭和36年（1961）に久重に通じた村営バスであったが、人口減に伴う利用者数の減少をうけて、平成31年（2019）3月から、スーパーと地域を結ぶ「おでかけバス」の実証運行が始まった。

今なお続く祭礼

集団移転後、農業生産面も含めて共同活動はみられないのが実態であるが、神社の祭礼の日には、旧村人が集う。

久重山の惣鎮守「仁井田神社」は、未だに大屋敷に鎮座しており、正月・7月・11月の祭りの内、秋祭りには関係者が神職を招いて神事と直会を続けている。村の記憶は、祭と小学校の同窓会「久重会」で再確認される。

林道と地籍調査

現在、国と県が展開する林業政策の下、高知県では植林の伐採が急速に進み始めた。村人が去った後に造成された久重地区の林道が活用される日は来るのであろうか。

久重地区では地籍調査も進んでいる。未だに土地は住民のものである。

▲加重に残る1戸

芸西村 地域バス実証運行

来年3月本格導入目指す

▲『高知新聞』
（平成31年〔2019〕4月20日朝刊、高知新聞社提供）

▲地籍調査の境界杭（ツヅラオ）

▲大屋敷から板渕間の林道

▼令和2年（2020）の秋祭り

村を去るとき

昭和35年（1960）からの四半世紀で、久重の人口は9割以上減少した。先祖代々の土地を離れるとき、人々は何を思うのだろうか。

久重の場合、その様子を土佐の民俗学者・田辺寿男がつぶさに写真に収めている。ここではその記録を中心に、集団移転前後の集落と人々の姿を紹介する。

家を運ぶ

宇留志では家屋を移転先に移築した例があった。その作業は、大小の部材を谷に渡したワイヤーロープを使って吊り下ろすというもので、急斜面での作業は慎重を要した。

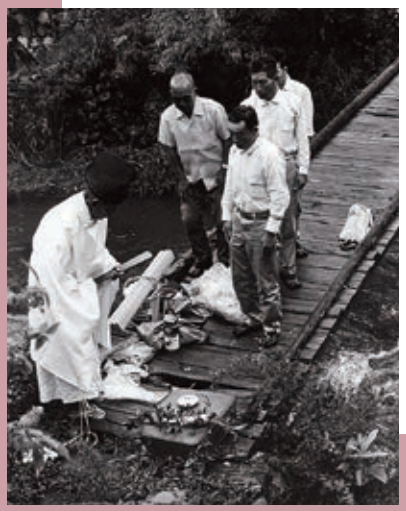
木を植える

村を去るにあたり田畑や屋敷地にスギやヒノキを植えた。将来への希望を小さな苗に託したのである。しかし、林業の衰退が進み、それら木々の多くは放置されている。

墓を下ろす

深く墓下を掘り、1体ごとに箱に入れ、名前を付す。その箱を抱え、墓石を担ぎ、山を下る。大屋敷では、親戚中寄り合って30基もの墓を下ろした家があった。

神社を遷す



板渕の氏神は、集落から1時間かかる山の頂上に鎮座していた。離村後、神社を下ろすことを決めた氏子は、太夫（たゆう）（神職）とともに山へ入り10日間かけ、芸西村馬ノ上に遷座した。

撮影：田辺寿男　写真提供：高知県立歴史民俗資料館

上から板渕 ―赤野川を挟んで北側の家々（昭和43年〔1968〕頃）／宇留志 ―本村の山本家と公民館が写る（昭和44年〔1969〕頃）／大屋敷 ―仁井田神社の祭日（昭和50年〔1975〕頃）／加重 ―山中家の屋敷（昭和50年〔1975〕頃） 以上芸西村文化資料館蔵／ツヅラオ ―空き家が並ぶ（昭和52年〔1977〕頃、個人蔵）

久重山の今と人々の記憶

「廃村」にも人は訪れる。久重では、山仕事、墓参り、狩猟、山菜採りなどで出身者が帰ってくる。神社の祭礼や小学校の同窓会では、大勢が集まって昔話に花を咲かすこともある。

そのような機会に「久重の人々」から、村の自然や歴史、山の暮らしや移住の思い出など、様々なお話を聞くことができた。

昭和46年廃村 大屋敷

㊤ 仁井田神社

450年の歴史を有する久重の総社で大屋敷に所在。江戸時代後期の社地は6代（約120㎡）。現在は、7月・11月正月の年3回、お祭りが行われている。境内には十二所神社と滝ノ平山頂から遷座された八面王神社（大屋敷の氏神）もある。

昭和45年廃村 板渕

㊨ 集落跡

家地や畑地跡の石垣が多数見られる。しかし、集落跡は離村時の植林で覆われ、外観からは全貌を確認することは難しい。

㊧ 石灯籠

集落跡に建つ。江戸末期から明治初期にかけ建立された「金毘羅様」と伝わる。芸西村内各所で見られ、久重では5集落全てに現存する。

上：集落跡　下：名松神社跡

◎昭和20年頃の集落と戸数

板渕：15戸
宇留志：21戸
- ●本村（土居・イノ谷）10戸
- ●キヂ4戸
- ●谷屋敷3戸
- ●大行3戸＋対岸に1戸

大屋敷：7戸
- ●大屋敷6戸
- ●久重谷1戸

加重：19戸
- ●加重（谷口・西平含む）13戸
- ●ヌタノクボ3戸
- ●カシヤマ3戸

ツヅラオ：7戸

宇留志の石灯籠

昭和48年廃村 宇留志

㊨ 山本家跡

宇留志・本村の山本家屋敷跡では、漆喰塀とイスノキの大木が見られる。かつてはこの家に刀や火縄銃、刺股などの武器類が伝来した。

㊤ キヂの石仏

集落の名称は木地師に由来すると伝わり、木地屋敷とも呼ばれた。集落跡近くの路傍には石仏が建つ。

屋敷跡

水田跡

加重

令和2年1戸

㊧ 山中家跡

戦国時代に入部し、江戸期は名本（庄屋）、近代は地主として、久重において一貫して力を持った山中家。人が去り原野に戻りつつある屋敷跡だが、現在、縁者による水田の復活に向けた整備が行われている。

左：線刻地蔵
右：地蔵堂跡

上：不動明王像　下：廃屋

大屋敷の石灯籠

㊦ 三宝様

「廃村」以前は、仁井田神社の祭礼後に、三宝様と金毘羅様（石灯籠）・不動様でも祭事が行われた。

㊧ 聖神社

古来、加重およびヌタノクボの氏神と伝わる。江戸時代の棟札などが収められている。

㊧ 谷口の集落跡

久重の中心地といわれた集落。かつては売店2軒、郵便配達の中継所、土電バス宿舎などがあった。
白木山・道家両谷の合流部には、各川に架かる橋が残る。

㊧ 久重小学校跡

小学校跡地に建てられた「芸西村山の家」は、近年まで研修施設として利用されていた。同窓会「久重会」は毎年ここで開かれ、40人ほどが集まる。

加重の石灯籠

上：釣井（井戸）跡
下：廃屋

㊦ 十二所神社

ツヅラオ・カシヤマ・ヌタノクボを氏神圏とする神社。
現在も氏子が集まり10月に祭事が行われている。

㊦ 峠の馬頭観音

ツヅラオ分岐の路傍に建つ像、明治16年（1883）の銘が刻まれる。馬の保護神として信仰されたものといわれ、芸西村内の西分や馬ノ上でも見られる。

ツヅラオ

昭和52年廃村

㊤ 石灯籠

集落の小山に建つ。金毘羅様と思われるが、集落の開拓を記念した石造物との説もある。

※道路の改良や造成により地図上の道路表示と実際の道が異なる箇所がある。これにより神社や石灯籠などの正確な位置を表示できていない場合がある。

宇留志

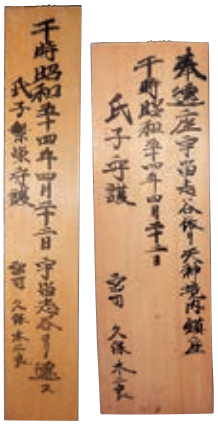
話を聞いた人
山本幸博さん
（昭和21年生まれ・74歳）

宇留志には、本村（土居・イノ谷）・キヂ・大行・谷屋敷という集落が点在し、昭和初期には20軒程、明治には40軒近くがあったらしく、久重の中で最大の村だったという。

神社も山々に複数あったが、集落から人が消えた後、もう誰も山に戻ることは無いだろうと、平地に下ろすことを決めた。

昭和54年（1979）、6つの神社を西分（芸西村）にある天満宮の境内に移した。各お宮には、遷座を記録した棟札が収められている。

▼遷座を記録した棟札
（左：恵美須神社、右：大山祇神社）



板渕

話を聞いた人
山中祐夫さん
（昭和5年生まれ・90歳）
山内應盛さん
（昭和8年生まれ・87歳）
山内原収さん
（昭和23年生まれ・72歳）

板渕・宇留志は、他の3集落とは異なり、赤野川の谷筋に立地していた。小学校まで徒歩1時間の場所である。

昭和初期までは、赤野川に材木を流していた。山師たちが数日かけ、12㎞先の赤野（安芸市）の河口まで運んだ。仕事の後は平地で宿泊することも多かったらしい。

和食（芸西村）にあった旅宿「琴風亭」の宿帳に、久重の村人が度々登場するのはこのためだろうか。

◀琴風亭当分帳
（昭和7年〔1932〕、
高知県立歴史民俗資料館蔵）

加重

話を聞いた人
山中啓郷さん
（昭和22年生まれ・73歳）

山中啓郷さんは40年前、高知市から加重に帰ってきた。現在、夫人と2人暮らしのこの山中家が久重に残る唯一の世帯である。

久重総社・仁井田神社の総代を務める山中さんは、氏子と相談し村役場に働きかけ、平成26年（2014）に県道から神社までの道を通した（大屋敷出身の谷山素示さんが土地を提供した）。おかげで急斜面を経ずお宮に行けるようになり、足腰の弱い高齢者がお祭りに参加できるようになった。

消滅が危惧される久重だが、古里を決して忘れまいとする人々の思いが、新たな道をつくったのである。

▼仁井田神社へ続く道
（平成27年〔2015〕撮影）

大屋敷

話を聞いた人
谷山素示さん
（昭和7年生まれ・88歳）
筒井みちさん
（昭和25年生まれ・71歳）

谷山素示さんは、昭和45年（1970）2月に山を下りた。娘と一緒に登下校してくれていた児童の家が移住すると聞き、幼子1人で山道の通学は困難と考え離村を決めた。希望した「集団移転」の対象とはならなかったが、周囲の助けもあり馬ノ上（芸西村）に家を建てた。

一方、筒井みちさんの家（谷山家）は、昭和46年（1971）5～7月の間に山を下りた。「集団移転」で大屋敷から岡本団地に入居した2軒の内の1軒である。

この谷山家が大屋敷を最後に離れた家だという。

▼最後に離村した谷山家夫婦の墓。
故郷の大屋敷に建つ。

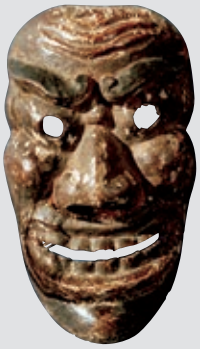
白木山 道家

話を聞いた人
坂本眞生さん（昭和5年生まれ・90歳）
坂本幸八郎さん（昭和8年生まれ・87歳）
大野勝清さん（昭和25生まれ・70歳）

白木山のタキユリ

カノコユリの変種で希少植物。久重小学校長で植物研究者でもあった坂本福三郎氏が保護育成し、かつては約1200㎡の山の斜面に咲き乱れ、大勢の見物客で賑わった。しかし、白木山は平成27年（2015）に廃村となり、現在ユリはシカ・イノシシの食害により見ることはできない。

▶坂本眞生氏提供



◀芸西村文化資料館提供

道家の神楽

大野家伝来の「神道家伝神楽次第」によると、文治2年（1186）に紀州熊野から12の神楽面を持参し祭日に用いてきたとされる。由緒ある神事舞だが、継承者不在で昭和43年（1968）を最後に途絶えている。その頃100人近くいた道家の人口は現在3人となっている。

ツヅラオ

話を聞いた人
梅木昭和さん（昭和4年生まれ・91歳）

江戸時代、先祖が山を切り開き、川の流れを変えて開発を行った。ツヅラオは谷底の集落で土地は限られる。ゆえに一枚でも多くの水田を確保したかったはずである。河原で見られた堰らしき石組み、大岩にあいた沢山の穴は開発の痕跡と考えられる。

このような集落の営みについて梅木さんは仲間同士で再三語り合ってきたという。

先人たちから受け継がれた土地は、令和元年（2019）に始まった地籍調査で、今改めて確認されている。

▼明治時代の切図
（複写、梅木昭和氏提供）

山を下りた神々

名松神社

板渕の氏神で現在は芸西村馬ノ上瓜生谷に所在。昭和43年（1968）10月に板渕の山から移された。現在も出身者による祭礼が年2回行われている。

宇留志の神社

昭和54年（1979）、芸西村西分に遷座した6つのお宮。恵美須神社、宇賀神社（三宝様）、地主神社（地の芝様）、竈戸神社（滝の上様）、應神社（ほうの神社）、大山祇神社（雨神様）。祭事は3月と10月に行われている。

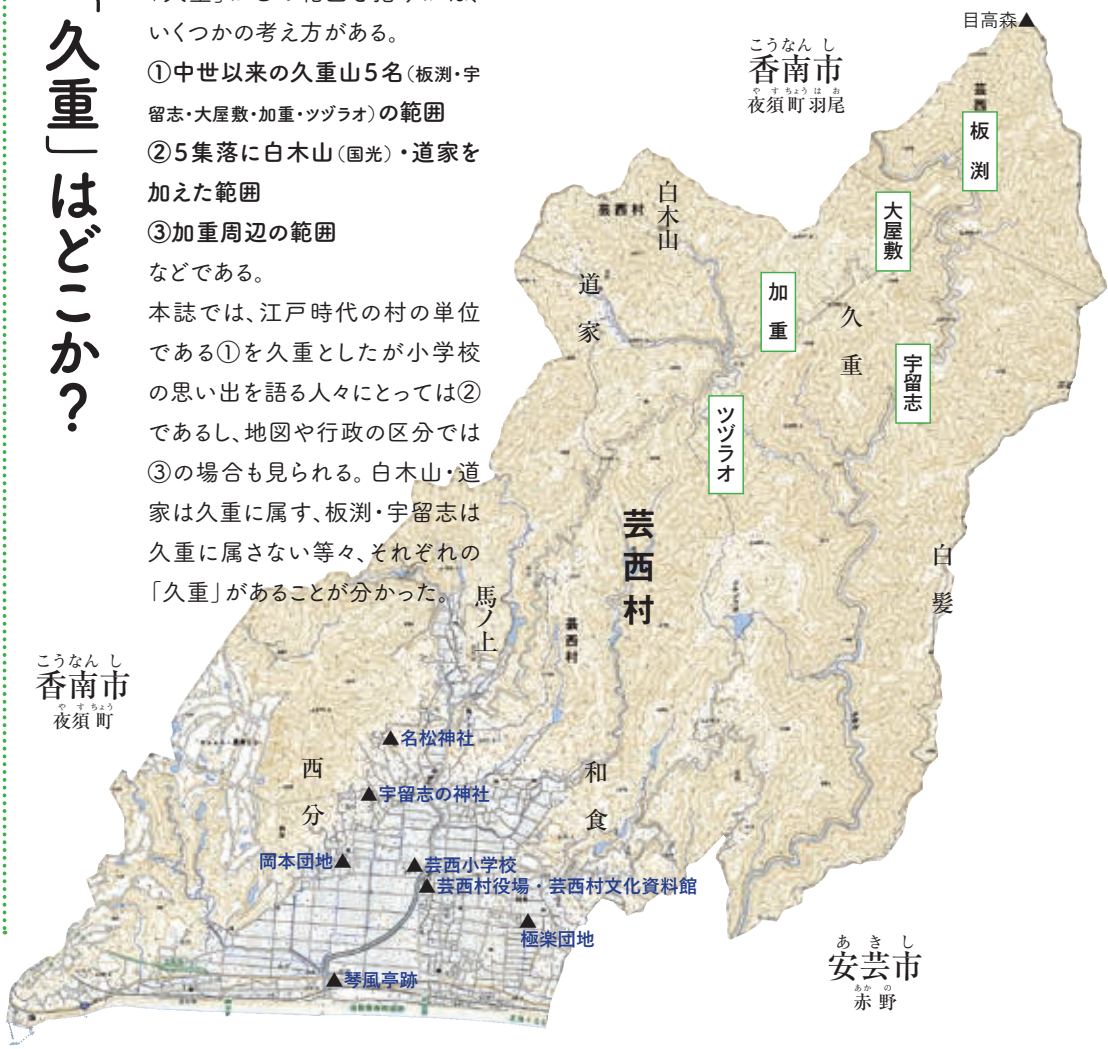
「久重」はどこか？

「久重」がどの範囲を指すかは、いくつかの考え方がある。

①中世以来の久重山5名（板渕・宇留志・大屋敷・加重・ツヅラオ）の範囲
②5集落に白木山（国光）・道家を加えた範囲
③加重周辺の範囲

などである。

本誌では、江戸時代の村の単位である①を久重としたが小学校の思い出を語る人々にとっては②であるし、地図や行政の区分では③の場合も見られる。白木山・道家は久重に属す、板渕・宇留志は久重に属さない等々、それぞれの「久重」があることが分かった。



久重回顧録

梅木昭和さんの話

梅木昭和さん（91歳・高知市在住）は、香美郡東川村久重の最南部、ツヅラオに生まれた。

中等学校進学以来、久重に住むことはなかったが、定年退職後、故郷の衰退と元住民同士の関係の希薄化を憂い、廃校となった母校・久重小学校の同窓会の開催を発起、以来30年間、その活動に関わっている。

当然ながら、久重ゆかりの人々との交友関係は広く、今回の「廃村調査」における歴史資料の所在把握や出身者への聞き取りなどに関して、多大なご協力をいただいた。

またご自身の記憶も鮮明で、戦前・戦後の生活など、久重に関する様々なお話を手書き原稿で多数ご提供いただいた。

ここでは〝久重の長老〟こと梅木昭和さんのお話を紹介する。

谷底の集落

ツヅラオは谷底である。土地は狭く農業や山仕事だけでは生活が立ち行かない。加えて子供の学費の工面は大変なことであった。

久重大総代を務めていた祖父は、家族や地域の行く末を案じ、農業の傍ら養蚕や炭焼き、果樹栽培に取り組むなど、早くから現金収入の道を模索していた。

その後を受け継いだ両親は身を粉にして働いた。父は安芸郡馬路村魚梁瀬の国有林伐採作業、旧満州国での建設工事など国内外への出稼ぎもした。

「将来は役人か軍人に」と進学を勧めた母は、行商で再々山を下りた。天秤棒を担いで片道8㎞、芸西村和食の家々で野菜や山菜を売った。当時は和食に行くのを「浜行き」と言い、子供たちは親の浜行きの度に、お土産を心待ちにしていたという。

梅木さんは高知市内の中等学校へ進学、後に就職した会社で20年近く全国転勤も経験した。「山は良い思い出も多いが、平地や都会に比べると生活には不便なところ。両親は苦労したと思う。いくら感謝してもしきれない。」と梅木さん。

昭和52年（1977）に最後の1軒が芸西村西分へ移住し、谷底の集落は消滅した。

小学校の卒業写真（昭和17年〔1942〕）
後列中央が梅木さん。

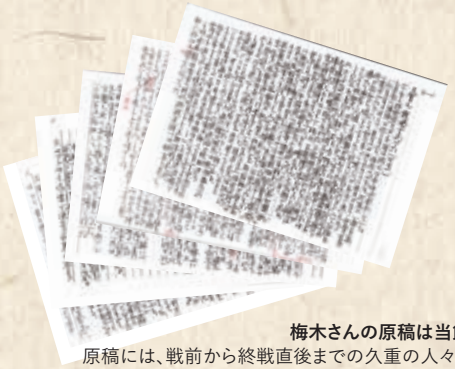
久重も戦場だった

昭和20年（1945）7月4日未明に起きた高知大空襲の最中、下宿生だった梅木さんは間一髪で難を逃れた。焼失した市街地を眼前にして、とにかく家に帰ろうと決心。久重まで40㎞の道のりをやっとの思いで帰り、家族との再会を果たした。

この頃は久重にも陸軍が駐屯しており、大屋敷やツヅラオ付近に爆弾が投下されたこともあったという。

そんな中、帰省中の梅木さんは同世代の少年兵3人と知り合い、交友するようになっていた。彼らは、久重から15㎞離れた住吉（香南市夜須町手結山）に駐留していた海軍の特攻隊員で、休暇を利用して山によく遊びに来ていたのである。

8月15日、この日も野山や河原で一緒に過ごしていたが、正午過ぎ、「玉音放送」が流れると、彼らは涙し落胆し、住吉の隊へ急行した。その翌日、悲劇は起きた。水上特攻艇



梅木さんの原稿は当館ホームページで閲覧できる。
原稿には、戦前から終戦直後までの久重の人々の暮らし振りが記されている。
https://www.kochi-johaku.jp/guide/local/

ツヅラオ全景（昭和30年〔1955〕）

コラム 消える地名

昭和40年代、久重5集落の内、板渕・大屋敷・宇留志の3つが無住となり、地図からは表記が消えていった。

人が居なくなれば、地名は意味を失うのだろうか。

住民登録が無くとも、祭りや墓参りなど折に触れ、人々は故郷を訪れている。

諸事情あるだろうが、地図から地名が消えるのは、久重山数百年の歴史を考えたとき、あまりにも悲しい。

「廃村」の問題を考えるとき、地名の重みを感じずにはいられない。

「震洋」の爆発事故で111名の若き兵士が犠牲となったのである。おそらくは彼らも帰らぬ人となったのでは・・・。

この時の異常を告げる爆音は、遠く久重の山間にまでこだましたという。

演芸会の思い出

娯楽が限られていた戦前・戦後、村の青年たちが寄り合い、芝居や歌などの出し物をしていた、という話はよく耳にする。

久重も例外ではなく、戦前から「演芸会」が開かれ、終戦直後は、外地から帰還した若者が中心となり行われていた。昭和21年(1946)から数年間は、春休みとお盆の年2回、小学校を会場に開催され、梅木さんは自身が演劇部に所属していたこともあり、毎回楽しみにしていたそうである。

会の出演者は主に加重、ツヅラオ、道家、大屋敷だが、遠く板渕からも参加があり、本番が近づくと毎晩のように稽古に励んでいた。

当日は午前11時から午後4時頃まで、芝居・舞踊・「やくざ踊り」(股旅物)・寸劇・お笑いもの、さらには飛び入りの一芸など、多くの出し物が披露された。

観客は馬ノ上、和食、西分、羽尾など久重の外からも大勢来て、会場は一杯になっていた。

各家にラジオさえ無かった時代、演芸会は人々の数少ない楽しみであり、大切な社交の場でもあった。

廃村の同窓会

学校の休廃校が増え続ける高知県。その数は500を優に超える。学び舎を失う地域は、過疎化が進む山間部に多く見られ、なかには校区内の集落が消滅した例も少なくない。久重地域はまさにその典型といえる。

久重小学校は「集団移転」から5年後の昭和51年(1976)3月、101年の歴史に幕を下ろした。当時、ある村人は「学校を中心に助け合ってきた心を忘れてはならない。〝久重の灯〟が消えないように。」との言葉を残している。

このような声を受け、梅木さんは定年を機に同窓会を企画。平成元年(1989)の第1回は予想を超える100名以上が集まった。

母校と故郷を懐かしむこの会は、通称「久重会」として30年余り、現在も梅木さんの後を継いだ次世代の世話役・田中茂太郎さんを中心に続けられている。「苦労もあったがそれも楽しい思い出。会が続いたのは古里を思う久重の人々の心。」と梅木さん。

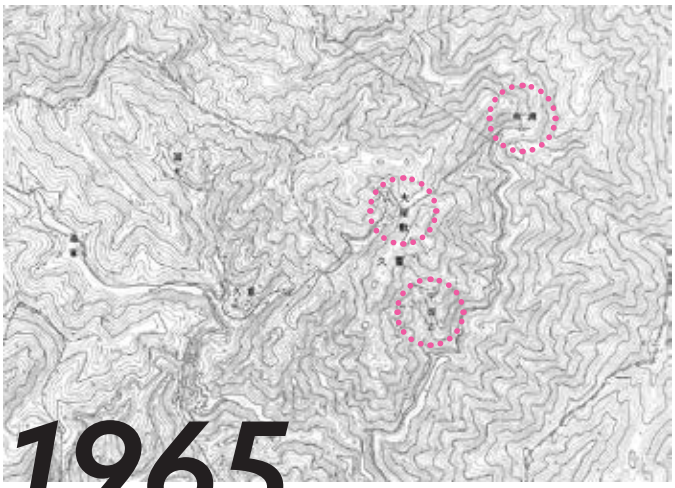
廃村は、地域への思いをいっそう強くさせるのかもしれない。

梅木昭和さん

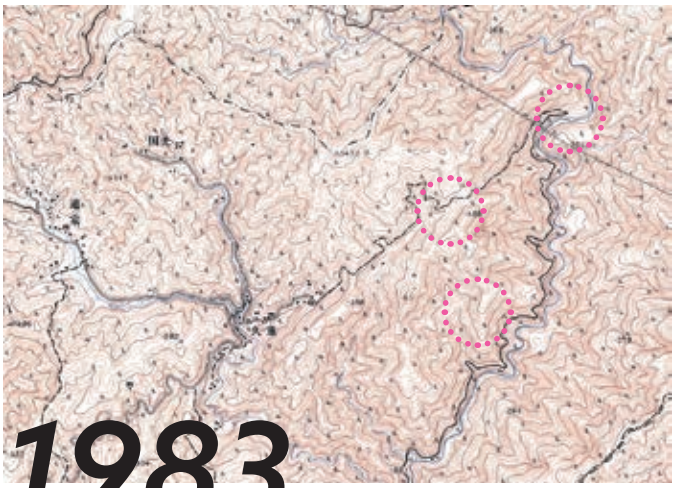
昭和4年：ツヅラオに生まれる
昭和17年：東川村立久重尋常小学校卒業
昭和23年：高知県立海南中学校(旧制)卒業
昭和24年：高知県立海南高等学校(新制)卒業
昭和24年：製菓会社入社
平成元年：久重会(同窓会)開始

写真上から
震洋隊慰霊碑(香南市夜須町手結山)／演芸会の記念写真(昭和21年〔1946〕)／第2回久重会(平成2年〔1990〕)／第31回久重会(令和元年〔2019〕)

※本頁掲載の写真のうち「震洋隊慰霊碑」および「第31回久重会」以外の写真はすべて梅木昭和氏より提供いただいたものを用いた。



1965 昭和40年(1965)発行 1/25000地形図(国土地理院)



1983 昭和58年(1983)発行 1/25000地形図(国土地理院)

久重の歴史を伝えるモノ

地域の歴史を継承する、その第一歩は歴史資料を調査し保存すること。これまでの記録集作成においても、地域の家々や集会所、寺社などに伝わる資料の調査を行ってきた。

今回の「廃村調査」は当初こそ難航したものの、お祭りや同窓会で知り合った久重の人々のご協力により、地域内外でいくつかの資料を確認することができた。

しかし、中には発見に至らなかったモノもある。ある集落で代々伝わった「総代箱」もその一つである。古老は「山の境を書いた書物らあが詰まった黒い箱。集落にとって一番大切なもんじゃったに無いというのは大事。けんどしようがない。」とその無念さを語った。

地域の資料を大切に保存する。そのことが、そこに生きた人々の証を未来へ伝えていくことにつながる。

板渕の古文書（個人蔵）

オソゴエ地蔵

「長宗我部地検帳」でも記録されたオソゴエの地蔵堂（加重）は、昭和42年（1967）、久重山地域の人口減により維持困難となり廃された。本尊の地蔵菩薩立像と脇仏の童子像は、久重に檀家を多く持っていた長谷寺（香南市夜須町羽尾）に遷座された。この地蔵尊は、旧地の名を冠し「オソゴエ地蔵」と称され、現在も同寺で祀られている。

仁井田神社の神宝類

棟札や鎗、神鏡など江戸から昭和までの5集落ゆかりの歴史資料が伝わる。なかでも絵馬は、「賤ヶ嶽の合戦・七本槍の図」（芸西村指定文化財）をはじめ、騎馬武者、芝居、蒸気船など様々な題材が描かれた10点余りが見られる。掲載資料は、明治5年（1872）に加重氏子中が奉納した一辺150cmを超える大型の絵馬。

門脇鎌久氏収集文書

芸西村の郷土史家・門脇鎌久氏が、村内で収集した約500点の資料群（芸西村文化資料館蔵）。掲載資料は、道家と久重の名本・足立家に伝来した弘化4年（1847）の「宗門人別改帳」の一部。家数142軒、人口706人、男396人、女310人など、道家・久重山両村の戸口情報を東川村庄屋に報告している。

国沢家文書

旧東川村長を務めていた道家の横山家伝来のもので、江戸から昭和初期までの資料群58点（現在は国沢家所蔵）。掲載資料は、明治24年（1891）頃、久重尋常小学校児童57名の名簿情報を父兄に通知するよう依頼した文書。鉛筆で児童の住所も記され、宇留志19名、板渕13名、加重5名、ツヅラオ5名、大屋敷4名、カシヤマ3名など、各集落の児童数が確認できる。

幕末の皿鉢

大屋敷の旧谷山家納屋で見つかった食器類23点。箱書きに「嘉永七寅ノ九月十八日」、「さわち 八」、「こざら 十」、「白木山」と記されており、幕末の久重山周辺における祭事や宴席で使用された可能性がある。令和元年（2019）、芸西村文化資料館に収められた。

集落の写真

昭和44年（1969）頃に芸西村役場が撮影した写真類。集団移転の対象となった集落の遠景、道路、田畑、家屋など、廃村直前の風景が写されている。掲載写真は、赤野川左岸に存在した大行集落（宇留志分）。付近に橋は無く、子供たちは川を歩いて渡り4km離れた小学校へ通っていたため、大水時には登校できなかったという。

コラム

米国からの長持

大屋敷の旧谷山益俊家納屋に、一竿の長持があった。大屋敷に初めて足を踏み入れた35年前から気になっていたものである。差出は米国シアトルの「Noboru Akitomo」、宛名は和食村橋本福吉気付「安芸友登」。つまり、米国から日本に帰国する安芸友登氏の長持であった。

安芸友登は、明治33年（1900）に大屋敷分久重谷に生まれ、長じて渡米。戦争が激しくなると家族とともに一旦帰国し、谷山家に身を寄せ、戦後再び米国に渡った。一族の多くも同様で、登はレタス栽培で成功した。昭和43年（1968）に没し、現在はカリフォルニアを中心に一族が暮らす。今回の調査で、積年の謎が解決した。加えて、大屋敷に鎮座する久重山5名の総社・仁井田神社の本殿建築に、安芸友一族が建具技術をもって関わったことも判明した。

定住あるいは出稼ぎで渡米を選んだ久重の家族は数家あったらしい。山の生活に見切りをつけて移住する動きは、すでに戦前から始まっていたのである。

近代における久重の或る一族の選択と移民史を物語る長持は、芸西村文化資料館で保存されることになった。

納屋で発見した長持／仁井田神社本殿の建築／渡米後の安芸友夫妻／アメリカに建つ墓／安芸友一族
※アメリカで撮影された安芸友家関係の写真3点は安芸友幸氏より提供いただいたものを用いた。

「廃村研究」の提言

天保5年（1834）に幕府が編纂した「天保郷帳」には、約63000の村が記されている。近世の村は、先ずは地形・気候・土・水・植生などの自然条件に規定され、生業・人口・交通などの社会的要因や、時に政治等の外的影響を受けつつ、その骨格が形成される。その後、長年にわたる村人の時間の積み重ねによって、生活様式や人間関係、冠婚葬祭などのしきたり、伝統や文化といった個性を持つ独自の村柄が生み出される。

近代になると、政治、経済、教育、軍事等、様々な要因で、人々は今までにない規模での移動を始め、「田舎から都会へ」の動きは、拡大の一途をたどる。そして、近代化の名の下で推し進められた経済政策によって、村は大打撃を受けることになる。

□□□

人々をじっくりと育てた村々が、次々に滅んでいる。廃村である。高知から「限界集落」という言葉が生まれ、その論を相対化、克服すべく、「関係人口」や「交流人口」という用語も登場、活発な議論が展開している。

しかし、既に限界を超えた村は実在する。人が去り、道が潰え、神社仏閣が朽ち、遂には地図からも消された村々。理屈ではなく、その場を歩いてみればいい。家屋敷のたたみ方、墓や神仏の仕舞いのつけ方、それぞれの思いによって様々であるが、そこを去る人たちの姿を想像した時、村の歴史の重みを感じざるをえないだろう。

□□□

村が様々になり立ったと同様に、廃村の原因も様々である。地震や津波、土砂崩壊や疫病などにより消滅した村がある一方で、自らの手で、解体しようとする動きもあった。戦後の民主化運動の一つとして展開された、村社会における封建打破、共同体解体運動には、歴史学も少なからずかかわった。

それでも、村の基本はそう変わることはなかった。それが封建的であれ、時間を重ねて作られた村の力は、想像以上に強靭だったのである。

しかし、高度経済成長の歩みは、遂に村の存続自体を脅かすに至った。殊に、プロパンガスをはじめとする燃料革命は、炭や薪を生業の基本とした山の民には致命的で、平地と山の生活格差を生んだ。若者は、平地の生活に憧れ村を去る。教育もまた然り、山の学校は平地の学校に統合され、子供の進学に合わせて家族で山を降りたという話もよく聞く。

数百年続いた村が、わずか20年足らずで、急速に滅び始めたのである。

住民の意思による人口減がある一方で、行政の効率化という政策によって、「強制的」廃村が執行された事例もある。ある県では、山から降ろした老人たちが、二度と村に帰れないように、行政が竈と風呂を破壊し廻ったという。

□□□

人類の歴史を振り返った時、確かに歴史は変化の産物であるといえる。しかし、昨今の栄枯盛衰の転変は、その変化が余りに早すぎ、余りに人為的過ぎる。

廃村問題は、経済、歴史、政治、教育等の複合的社会問題である。これは「田舎」のことだけではない。大都市では、高度経済成長期に成立した大規模集合住宅における高齢化と「廃村」が課題になっている。

この問題は、人類の来し方、行く末を検討する上で極めて重要な主題なのである。我々は、廃村研究の本格化を提言したい。

◉編集後記

「地域記録集」は、過疎で失われる歴史の保存と地域振興への寄与を意図して企画し、その編集は住民と協力して行うことを基本に据えている。

とはいえ、各地における人口減少は深刻で、住民がゼロとなり消滅した集落も増え続けているのが現実である。そして、この問題の解決に私たち博物館が直接役立つことは難しい。

一方、たとえ無住となった地域であっても、多くの歴史資料や人々との出会いがあることに本誌編集の過程で気づかされた。やはり私たちがすべきは、村の歴史と記憶を後世へ伝えること、またその活動を地域の人々と地道に進めていくことである。

僅かに残る一世帯も離村を考えているという久重。同様に全戸移住を検討中の道家と、先に廃村となった白木山とともに、数百年の歴史を紡いできたこの山間地域は、最後の時を迎えようとしているのかもしれない。

消えゆく土佐の村々を記録する。それは今からでも遅くはないことを実感した。

—企画員　筒井聡史

地域記録集 土佐の村々 4
高知県安芸郡芸西村久重地区
香美郡 久重山村

発行：令和 3 年（2021）2 月 1 日
編集：高知県立高知城歴史博物館
執筆者：渡部　淳（館長）
横山和弘（副館長兼企画課長）
髙木翔太（学芸員）
筒井聡史（企画員）
デザイン：Takemura Design & Planning
印刷：共和印刷株式会社

◎お世話になった人々

【機関・団体】
久重会
芸西村役場
芸西村教育委員会
芸西村文化資料館
高知県立歴史民俗資料館
高知市立市民図書館
高知新聞社
長谷寺

【個人】
安芸友幸
上杉博志
梅木昭和
大野勝清
小笠原章子
門脇鎌久
国沢弘導
国沢廸子
公文睦子
小谷由美
小松津江
小松みち子
坂本幸八郎
坂本眞生
茂井鋭夫
茂井勲
茂井住子
茂井美智子
茂井福泉
竹﨑洋
田中茂太郎
田中万里子
谷山敦
谷山恵
谷山和恵
谷山聖
谷山千賀子
谷山日出男
谷山博
谷山雅清
谷山素示
筒井みち
築城悦子
野老山澄子
細井喜代子
堀田幸生
松浦美幸
山内清子
山内應盛
山内原収
山中智史
山中三良
山中祐夫
山中敏臣
山中啓郷
山中サミ子
山本幸博
吉川光雄
吉川利
（敬称略）

◎**主な参考文献**　横川末吉『大忍庄の研究』高知市立市民図書館 ,1959／「“八百年目”の下山 過疎にいどむ」(『高知新聞』全25回連載記事),1969／寺石正路『土佐名家系譜』歴史図書社 ,1976復刻／芸西村史編纂委員会『芸西村史』芸西村 ,1980／池田宗石『長谷寺誌 資料集』長谷寺 ,1982／横川末吉「山中文書の一研究」(秋澤繁編『長宗我部氏の研究』吉川弘文館),1986／『高知県の集落』高知県企画部企画調整課 ,1990／高知新聞社編集局『山よ—あすの指針を求めて—』高知新聞社 ,1992／森川辰夫「過疎集落の平坦部への移転—高知県安芸郡芸西村の事例—」(『日本の農業—明日への歩み—190 集落移転後の20年』財団法人農政調査委員会),1994／『田辺寿男の民俗写真 ぼくの村は山をおりた』高知県立歴史民俗資料館 ,1999／秋澤繁「土佐国」「大忍荘」(永原慶二他編『講座日本荘園史 10 四国・九州地方の荘園』吉川弘文館),2005／芸西村史編纂委員会『芸西村 半世紀の歩み』芸西村 ,2005／芸西村文化財保護審議会『芸西歴史散歩』芸西村教育委員会 ,2005／門脇鎌久著・芸西村文化資料館編『広報げいせいコラム全集』芸西村教育委員会 ,2020

※ P1、P12、P13、P15に掲載の地形図は、国土地理院の地理院地図（電子国土 Web）の画像を利用した。
※「香美郡」について、明治4年（1871）までは「香我美郡」の名称も用いられたが、本誌では「香美郡」の表記で統一した。